



吉川英治

三國志

悠久の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国
の人と心。魏蜀呉三国の覇権と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。

六興出版

吉川英治

三 国 志

第二卷 群星の巻

三国志 第2巻(全10巻)

平成2年1月20日 初版印刷

平成2年1月25日 初版発行

著者 吉川英治

発行者 賀来寿一

発行所 株式会社六興出版
〒112 東京都文京区水道2-9-2
電話 03(943)3431(代表)
振替 東京1-92448

印刷・製本 中央精版印刷株式会社
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan
定価はカバーに明記してあります。
ISBN 4-8453-0212-8 C0093

目

次

溯	白	珠	生	洛	虎	関	江	競	偽
	馬		死	陽	牢	羽	東	う	忠
	將		一	落		一	の	南	狼
江	軍		川	日	関	杯	虎	風	心
賦				賦		の			
酒						酒			
99	86	76	68	53	43	30	24	13	3

活雨権 間 蝶 丹
往の転 の

牛
と
「い
な
ご」
.....
215

愚
兄
と
賢
弟
.....
227

毒
と
毒
.....
238

群
星
の
巻

偽忠狼心

一

曹操を搦めよ。

布令は、州郡諸地方へ飛んだ。

その迅速を競つて。

一方――

洛陽の都をあとに、黃馬に鞭をつづけ、日夜をわ

かたず、南へ南へと風の如く逃げて来た曹操は、早

くも中牟県（河南省中牟・開封―鄭州の中間）――の

附近までかかつていた。

「待てっ」

「馬を降りろ」

関門へかかるや否、彼は関所の守備兵に引きすり

降ろされた。

「先に中央から、曹操という者を見かけ次第召し捕

れと、指令があつた。其方の風采と、容貌とは人相書に甚だ似ておる」

関の吏事は、そう言つて曹操が何と言いのがれようとしても、耳を貸さなかつた。

「とにかく、役所へ引ッ立てろ」

兵は鉄桶の如く、曹操を取り囲んで、吟味所へ拉してしまつた。

関門兵の隊長、道尉陳宮は、部下が引ッ立てて来る者を見ると、

「あつ、曹操だ！ 吟味にも及ばん」と、一見して言い断つた。

そして部下の兵を搞つて彼が言うには、

「自分は先年まで、洛陽に吏事をしておつたから、曹操の顔も見覚えてゐる。――幸いにも生擒つたこの者を都へ差し立てれば、自分は万戸侯という大身に出世しよう。お前たちにも恩賞を頒かつてくれるぞ。前祝いに、今夜は大いに飲め」

そこで、曹操の身はたちまち、かねて備えてある

鉄の檻車に抛りこまれ、明日にも洛陽へ護送して行くばかりとなし、守備の兵や吏事たちは、大いに酒を飲んで祝った。

日暮れになると、酒宴もやみ、吏事も兵も関門を閉じて何処へか散ってしまった。曹操はもはや、觀念の眼を閉じているもののように、檻車の中に倚りかかって、真暗な山谷の声や夜空の風を黙然と聴いていた。

すると夜半に近い頃、

「曹操、曹操」

誰か、檻車に近づいて来て、低声に呼ぶ者があった。

眼をひらいて見ると、昼間、自分を一目で観破つた関門兵の隊長なので、曹操は、

「何用か」

嘯く如く答えると、

「おん身は都に在つて、董相国にも愛され、重く用いられていたと聞いていたが、何故に、こんな羽目

になったのか」

「くだらぬ事を問うもの哉。燕雀なんぞ鴻鵠の志を知らんやだ。——貴様はもうおれの身を生擒っているんじゃないか。四の五の言わずと都へ護送して早く恩賞にあずかれ」

「曹操。君は人を観る明がないな。好漢惜しむらく——というところか」

「なんだと」

「怒り給うな。君が徒らに人を軽んじるから一言酬いたのだ。かくいう自分とても、冲天の壮志を抱いておる者だが、真に、国の憂いを語る同志もない為空しく光陰の過ぎるのを恨みとしておる。折から、君を見たので、その志を叩きに來たわけだが」

意味ありげな言葉に、曹操も初めの態度を改めて、
「然らば言おう」と、檻車の中に坐り直した。

二

曹操は、口を開いた。

「なるほど董卓は、貴公の言われたようにこの曹操を愛していたに違いない。——しかしそれがしは、遠く相国曹参が末孫にて、四百年來、漢室の祿をいただいて来た。なんで成り上がり者の暴賊董卓ごときに、身を屈すべきや」

と語氣、熱をおびて来て——

「如かず国の為、賊を刺し殺して、祖先の恩を報ずべしと、董卓の命を狙ったが、天運いまだ我に非ず——こうして捕われの身となつてしまった。なんぞ今さら、悔いる事があるうか」

白面細眼、自若としてそう言う容子、さすがに名門の血すじをひいているだけに、争い難い落ち着きがあつた。

「……………」

默然——やや暫くの間、檻車の外にあつてその態を見ていた関門兵の隊長は、

「お待ちなさい」

言うかと思うと、檻車の鉄錠を外して、扉を開き、

驚く彼を中から引き出して、

「曹操どの。貴君はどこへ行こうとしてこの関門へかかったのですか」

「故郷——」

曹操は、茫とした面持で、隊長の行為を怪しみながら答えた。

「故郷の譙郡に歸つて、諸国の英雄に呼びかけ、義兵を挙げて再び洛陽へ攻め上り、堂々、天下の賊を討つ考えであつたのだ」

「さもこそ」

隊長は、彼の手を曳いて、密かに自分の室へ請じ、酒食を供して、曹操のすがたを再拝した。

「思うに違わず、御辺は私の求めていた忠義の士であつた。貴君に会つたことは実に喜ばしい」

「では御身も董卓に恨みのある者か」

「いや、いや、私怨ではありません。大きな公憤です。義憤です。万民の呪いと共に憂国の怒りをもつて、彼を憎み止まぬ一人です」

「それは、意外だ」

「今夜かぎり、てまえも官を棄てて此関から奔ります。共に力を協せて、貴君の赴く所まで落ちのび、天下の義兵を呼び集めましょう」

「えつ、真実ですか」

「なんで嘘を。——すでにこう言う前に、貴君の縄目を解いているではありませんか」

「ああ！」

曹操は初めて、回生の大きな歓喜を、その吐息にも、満面にも現わして、

「して、貴公はいつたい、何と仰つしやる御仁か」と、訊ねた。

「申しおくれました。自分は、陳宮字を公台という者です」

「御家族は」

「この近くの東郡に住まっています。すぐそこへ参つて、身仕度を代え、すぐさま先へ急ぎましょう」

陳宮は、馬を曳き出して、先に立った。

夜もまだ明けないうちに、二人は又、その東郡をも後にすてて、ひた急ぎに、落ちて行つた。

それから三日目——

日夜わかつたず駆け通して来た二人は、成臯（河南省・衛輝附近）のあたりを彷徨つていた。

「今日も暮れましたなあ」

「もうこの辺まで来れば大丈夫だ。……だが、今日の夕陽は、いやに黄いろッぽいじゃないか」

「又、蒙古風ですよ」

「あ、胡北の沙風か」

「どこへ宿りましょう」

「部落が見えるが、この辺はなんという所だろう」

「先程の山道に、成臯路という道標が見えました」

「あ。それなら今夜は、訪ねて行くよい家があるよ」

と、曹操は明るい眉をして、馬上から行く手の林を指さした。

三

「ほ、こんな辺鄙へんぴの地に、どういうお知り合いがいるのですか」

「父の友人だよ。呂伯奢りはくしゃという者で、父とは兄弟のような交わりまじのあった人だ」

「それは好都合ですな」

「今夜はそこを訪れて一宿を頼もう」

語りながら、曹操と陳宮の二人は、林の中へ駒こまを乗り入れ、やがてその駒を樹きに繋いで、尋ね当てた呂伯奢の門をたたいた。

主あるじの呂伯奢は驚いて、不意の客を迎え入れ、

「誰かと思ったら、曹家そうけの御息じやないか」

「曹操です。どうも暫しばらくでした」

「まあ、お入りなさい。どうしたのですか。いったい」

「何がです」

「朝廷から各地へ、あなたの人相書が廻まわっています

が」

「ああその事ですか。実は、丞相じやうしやう董卓を討ち損じて逃げて来た迄までの事です。私を賊と呼んで人相書など廻まわしているらしいが、彼奴やつこそ大逆たいぎやくの暴賊です。

遅かれ早かれ、天下は大乱となりましょう。曹操ももう凝じつとしてはいられません」

「お連れになつていゝる人は誰方どなたですか」

「そうそう、御紹介するのを忘れていた。これは道尉だうきやう陳宮という者で、中牟ちゆうむ県けんの関門を守備しており、私を曹操と見破みやつて召し捕らえたくらいな英傑えいけつですが、胸中の大志を語り合つてみたところ、時勢に鬱う勃はつたる同憂どうゆうの士だという事がわかったので、陳宮は官を捨て、私は檻おりを破つて、共にこれまで携たづなえ合つて逃げ走つて来たというわけです」

「ああそうですか」

呂伯奢りはくしゃは跪ひざまずいて、改めて陳宮のすがたを拝はいし、

「義人ぎじん。——どうかこの曹操を扶たすけて上げてくださ
い。もし貴方あなたが見捨てたら曹操の一家二門はことこ

とく減んでしまふ他はありません」

と、曹操の父の友人というだけに、先輩らしく慇懃に将来を頼むのであった。

そして呂伯奢は、いそいそと、

「まあ、御ゆるりなさい、手前は隣村まで行つて、酒を買ってきますから」

と、驢に乗って出て行つた。

曹操と陳宮は、旅装を解いて、一室で休息していたが、主はなかなか帰つて来ない。

そのうちに、夜も初更の頃、どこかで異様な物音がする。耳をすましていると、刀でも磨ぐような鈍い響きが、壁を越えて来るのだった。

「はてな？」

曹操は、疑いの目を光らし、扉を排して、又耳を敬っていたが、

「そうだ、……やはり刀を磨ぐ音だ。さては、主の

呂伯奢は、隣村へ酒を買いに行くなどと言つて出て行つたが、県吏に密訴して、おれ達を縛らせ、朝廷

の恩賞にあずかろうという気かもしれん」

呟いていると、暗い厨の方で四、五名の男女の者が口々に——縛れとか、殺せとか——言い交わしているのが、曹操の耳へ、明らかに聞こえて来た。

「さてこそ、われわれを、一室に閉じこめて、危害を加えんとする計にうたがいなし。——その分なれば、こつちから斬つてかかれ」

と、陳宮へも、事の急を告げて、にわかにそこを飛び出し、驚く家族や召使い八名までを、またたき間にみな殺しに斬ってしまった。

そして、曹操が先に、

「いざ逃げん」と、促すと、どこかで未だ、異様な呻き声をあげて、ばたばた騒ぐものがある。

厨の外へ出て見ると、生きている猪が、脚を木に吊されて、啼いているのだった。

「ア、しまった！」

陳宮は甚だ後悔した。

この家の家族たちは、猪を求めて来て、それを料

理しようとしていたのだ——と、わかったからである。

四

曹操は、もう闇へ向かつて、急ごうとしていた。

「陳宮。はやく来い」

「はっ」

「何を愚図愚図しているのだ」

「でも……。どうも、氣持が悪くてなりません。慚愧にたえません」

「なんで」

「無意味な殺生をしたじゃありませんか。かわいそうに、八人の家族は、われわれの旅情をなぐさめる為に、わざわざ猪を求めて来て、もてなそうとしていたんです」

「そんな事を悔いて、家の中へ、掌を合わせていたのか」

「せめて、念仏でも申して、科なき人たちを殺した

罪を、詫びて行こうと思ひまして」

「はははは。武人に似合はんことだ。してしまつたものは是非もない。戦場に立てば何千万の生霊を一日で葬ることさえあるじゃないか。又、我が身だつて、何時そうされるか知れないのだ」

曹操には、曹操の人生觀があり、陳宮には又、陳宮の道德觀がある。

それは違ふものであつた。

けれど今は、一蓮託生の道づれである。議論してられない。

二人は、闇へ馳けた。

そして、林の中に繋いでおいた駒を解き、飛び乗るが早いか、二里あまりも逃げのびて来た。

——と、彼方から、驢に二箇の酒瓶を結びつけて来る者があつた。近づき合うにつれて、ぷーんと芳熟した果物の佳い匂いが感じられた。腕には、果物の籠も掛けていたのだつた。

「おや、お客人ではないか」

それは今、隣村から帰つて来た呂伯奢であつたのである。

曹操は、まずい所で会つたと思つたが、あわてて、「やあ、御主人か。実は、きょうの昼間、これへ来る途中で寄つた茶店に、大事な品を忘れたので、急に思い出して、これから取りに行くところです」

「それなら、家の召使いをやればよいのに」

「いやいや、馬で一鞭当てれば、造作ありませんから」

「では、お早く行つておいでなさい。家の者に、猪を屠つて、料理しておくように言つておきましたし、酒もすてきな美酒をさがして、手に入れて来ましてからね」

「は、は、すぐ戻つて来ます」

曹操は、返辞もそこそこと、馬に鞭打つて呂伯奢と別れた。

そして四、五町ほど来たが、急に馬を止め、

「君！」と、陳宮を呼び止め、

「君はしばらく此処で待つていてくれないか」と言い残し、何思つたか、再び道を引返して馳けて行つた。

「どこへ行つたのだらう？」と、陳宮は、彼の心を解きかねて、怪しみながら待つていたところ、やがての事曹操は又戻つて来て、いかにも心残りを除いて来たように、

「これでいい！ さあ行こう。君、今のも殺つて来たよ。一突きに刺し殺して来た」と、言つた。

「えつ。呂伯奢を？」

「うん」

「なんで、無益な殺生をした上にもまた、あんな善人を殺したのです」

「だって、彼が帰つて、自分の妻子や雇人が、皆ごろしになつたのを知れば、いくら善人でも、われわれを恨むだらう」

「それは是非もありますまい」